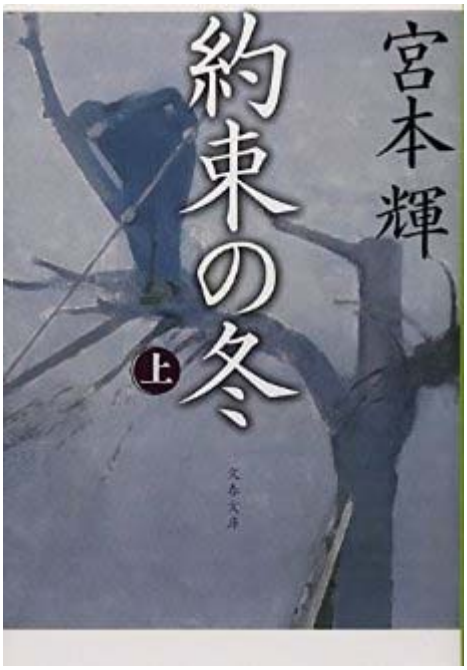
「約束の冬」宮本　輝

斉藤スミ子　　‘16.3.10



本はずしりと心の響く本と爽やかですっと読める本がある。悪く言えば、時間つぶしの本である。

この本はどちらかというと後の部に属する。

氷見留美子 32 歳が近所を巻き込んで展開される人生ドラマって感じである。10 年前に 15 歳の少年から突然手渡されるラブレター。

そこには、「10 年後に冬の来る前に前蜘蛛の子が空を飛ぶのが見られるから〇月〇日に〇場所で僕はあなたにプロポーズします。」と書かれてあった。ところから始まる。

ふ化したての蜘蛛の子が一生に一度、自分の出で冬風に乗り遠くへ飛び散るのである。それは子孫の維持と生命保持の自然界の摂理？ともいうべきものだと思う。

遠くへ飛び散ったもの、近くに落ちたものそれぞれの地で、それぞれの環境、状況の中で生き物はしたたかに生きていく、いや、いかねばならぬものだというのが主題だと思った。

サブ主人公（イヤ、こちらが主人公かも？）とでもいえる、留美子の近くに住む調理器具は鍋などを売る会社社長の上原佳二郎。彼は自分の息子と再婚相手の連れ子の息子の 3 人家族。そろそろ会社を息子に譲ろうかと考える年齢であるが芯のある、経営手腕もある魅力的な紳士である。自分は初婚、相手は再婚で子連れであったが連れ子の長男も愛情をもって育て、堅実家庭を築いていたが妻を早くに無くしていた。この紳士、佳二郎に本人も知らない自分の娘、緑がいたのでる。彼女もまた、愛情をもって義父に立派に育てられていた。緑は死ぬ前に母から頼まれたお金を返えしに、佳二郎を訪ね、お互い初めて関係を知る。

読み手としても順風満帆、堅実な道徳を字で行くような人に二十代半ばの娘の出現にびっくりしてしまった。こういう人でもこんな事があるのかとおもってしまった。

氷見留美子と 10 年前にラブレター　を渡した少年は佳二郎の長男（連れ子）でこの二人も 7 歳の年齢を超えて愛情を実らせていた。この二人の成り行きにも父親としての温かい目を感じる。

渡る世間に鬼はなし・・。人は健気（けなげ）に道徳的に真面目に生きているなって感心した。